『朝日新聞』夕刊 2011年7月12日 2頁

俺たちのクルマ立国 3

夢を見とどけた首飾り

ホンダの創業者、本田宗一郎が設立した本田財団は、毎年、優れた科学技術に本田賞を贈っている。1990年、独シュツットガルト大学の教授が、ドイツ人として初めて受賞した。

その授賞式に、シュツットガルトに思い入れのある2人が出席していた。1人は財団の理事を務め、同大学に留学経験をもつ東海大学教授の内田裕久(61)だった。もう1人は式の途中、内田の背中を突然バーンとたたいた。振り向くと、宗一郎がいた。

「内田さん、ドイツの工作機械は世界で一番良かったね。その昔、シュツットガルトに行って、どっさり買ってきたんだ」

話は1950年代初頭にさかのぼる。

当時のホンダは二輪車メーカーだった。自転車の後輪に50ccのエンジンをつけた「F型カブ」を52年6月に発売した。売れ始めて10月、宗一郎は「世界的視野に立って」という檄文を社内報に載せた。

「私の願っておりますのは製品を世界的水準以上にまで高めることであります」。宗一郎は日本と英米先進国との品質の差を「あまりにも甚だしい」と断じた。

敗戦から7年の日本のものづくりには、工夫だけでは手の届かない限界があった。その原因の一つが、工作機械だった。「『弘法は筆を選ばず』と言ったのは昔の譬え」。一流をつくるには、一流の機械が必須だと宗一郎は考えた。

用意した金は3億円。最終的には4億5千万円に膨らんだ。資本金1500万円、52年度の売上高14億円のホンダには巨額の投資だった。

宗一郎の指示で設計課長として欧州に買い付けに行った河島喜好(83)は当時20代だった。「若造が高額な機械を買いまくるものだから、びっくりされた」

河島はシュツットガルトにあったシャウト社から、20台の工作機械を買い入れた。円筒形の部品の内側を研磨する工作機械などのメーカーだった。

選んだ筆で、宗一郎は「世界一」を見据えた。当初は二輪車だった。世界的に有名な欧州のマン島レースに59年初参戦し、61年には125cc、250ccクラスで上位を独占する完全優勝を果たした。

自動車分野参入の夢の実現に本格的に取りかかるのは、その後だ。だが、実は50年代に大量輸入した工作機械の中に、二輪車の生産には不要だが自動車の生産には必要なものが含まれていた。開発はひそかに始まっていた。

河島を派遣しただけでなく、宗一郎も54年にシュツットガルトを訪れている。マン島レースを視察する帰途に欧州の工作機械メーカーや自動車組み立て工場を回り、欧州の実力を確かめた。その時にシャウト社も訪れた。

シュツットガルト周辺は19世紀末にゴットリープ・ダイムラーとカール・ベンツがガソリンエンジン車を生み出した自動車の聖地だ。シャウト社から20キロ西にはダイムラーの生家がある。

宗一郎はその地で、秘めていた自動車への夢を膨らませたのだろうか。

現地に住むエリザベート・ドレクセル(88)は今も宗一郎のことを覚えている。「なにしろ初めて会った東洋人でした。真珠の首飾りをいただきました」

彼女は、40年から83年までシャウト社の創業者ゲルハルト・シャウトの秘書を務めた。

エリザベートは宗一郎のためにドイツ国内のホテルや列車を手配した。そのお礼に宗一郎は「東京・銀座」と書かれたビロードの箱に入った、真珠の首飾りを買ってきた。

60年代初頭に来日した際、シャウトは宗一郎と再会している。この時、まだホンダは自動車生産を始めていなかった。「ホンダが自動車をつくったら第一号に乗ってもらいます」。宗一郎は感謝の念をシャウトに伝えたという。約束は実現しなかったが、ホンダは63年、軽トラックとスポーツカーを世に出した。

ホンダの車は今、ドイツ車に交じって自動車の聖地シュツットガルトを走る。「首飾りをもらった人の会社がこんなに大きくなるなんて。すばらしい」。その首飾りは、変わらずエリザベートの元にある。

(安井孝之)

エリザベート・ドレクセルさん

本田宗一郎さん